

「希望、感じるよね」ってどれかいつてなかったっけ。あれはたしか、はやぶさってのが帰還した時のことだ。

テレビ見てカンドーしたって、泣いてる人がいたよ。理解できねえ、と思った。世間はやんやの喝采だったけど、どう考えたって、あたしの未来が、はやぶさによって変わるわけないもんね。はやぶさが、あたしに明るい未来をもたらしてくれるなら、いくらでも喝采を送ってやる。泣いてやってもいい。

ラジオから漏れてくる「希望」という懐かしのメロディは、タイトルに似合わず、やけに暗い歌だった。その暗さが、妙に気分にもマッチしたのだ、たぶん。

そしてちょうどその時、あたしの視線は一冊の本の背表紙に止まった。机の上の棚に手を伸ばし、その目についた本、国語辞典を引っ張り出した。これは『岩波国語辞典』通称イワコクの第六版で、横組。国語辞典はふつう縦組だから、新しもん好きの父親が、こいつは珍しいと飛びついたらしい。やっぱり辞書は縦書きの方が見やすいな、と後で父さんつぶやく。二〇〇〇年の発行。お古としてあたしの机に回ってきた。

きぼう【希望】 未来に望みをかけること。□こうなればよい、なってほしいと願うこと。また、その事柄の内容。「進学を―する」□望みどおりなるだろうというよい見通

し。「将来の―を失う」

あたしは、そのページの下に、『Seventeen』の先月号をはさんだ。それからカッターを取り出して定規を当てると、イワコク横組第六版二八九ページの「希望」という文字と説明を切り取った。

余の辞書には「希望」という言葉はない！

ついでだから、リビングにあった『大辞林』第一版と『広辞苑』第六版も持ってきた。『大辞林』はあたしが生まれる前の代物。中型辞典といえば『広辞苑』だった時代に出了三省堂のものを新しもん好きの父親が買ったという。さすがに二冊持つとずっしりと重かった。

それぞれの辞書の「希望」を切り取った。

あとは、妹の『新明解』（母親のお古）だな。これも、ヤツの机から引っ張り出して、同じように切り取る。

これで、我が家の辞書から「希望」はなくなった。

ちょっと気分がすっきりした。それからすぐにはばからしくなった。電子辞書、切り取れねえよ。

希望をなくした、もとい、切り取った日の翌日。我が同級生たちに希望はありやなしやと思いが、戸